
境界線の上で

ぱずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
境界線の上で

【Nコード】
N8752I

【作者名】
ばずる

【あらすじ】
第三作目の作品です。ジャンルは学園。

ねえ母さん、俺は今なにをしているんだろう。

ただただ今を過ごして、なんの目標もなく時間を浪費して。

こつやつて重ねていく日々の先に、一体なにがあるっていうんだろう。

それでも惰性で生き続ける俺は、なにを糧に明日を目指せばいいんだろう。

ねえ、教えてよ母さん。

鳥の鳴き声は聞こえず、外からの騒音とテレビからの音声が入り混じっている部屋で、大久保^{おおくぼ}芳樹^{よしき}は一人で黙々と食事を摂っていた。近くには中学校の校章が入った鞆^{たも}が置いてあり、さらには制服を着ているため、当然ではあるが中学生だ。髪はシャツの襟に届くほどの長さ。ふと、置いてある鏡に写った幼さの残る顔に浮かんだ気だるそうな自らの表情を、芳樹は見ないふりをした。

「芳樹、行ってくるな」

どこからともなく聞こえてきた声。その声は芳樹の父親である大久保^{おおくぼ}伸樹^{のぶき}のもの。

「ああ、父さん、行つてらっしゃい」

芳樹は焼き加減にこだわった食パンをかじりつつ、声のする方向に振り返って答えた。芳樹の視界に写った背広姿の伸樹は、既に背を向けて玄関から出て行くところだった。

これが大久保家の日常、その常日頃の姿。芳樹はこのアパートに父親と二人暮らしで、母親は数年前に病死したためにいない。当然仕事で家事などしている暇のない父親に代わり、芳樹がこの大久保家の家事を担っている。特に生活が苦しいというわけでもないが、裕福というわけでも、また賑やかというわけでもない。しかし元来あまり息子と話すということをしていない父親だったため、芳樹はその

ことに対して不満を持っているわけではなかった。

「もう時間か……」

呟きつつパンの最後のひとかけらを口の中に放り込み、芳樹は鞆を手に取って立ち上がる。冬の日差しが入りつつあった窓のカーテンを閉め、学校指定の靴を履いて家を出る。

朝から吹きつける迷惑な北風に身を縮めつつ、すぐに家の中に戻りたい衝動に駆られる。しかし義務教育から逃げる気にはなれず、芳樹は学校への道を歩み始めた。

揺れが激しい時期の男子中学生と、寡黙な父親の二人暮らし。芳樹はその暮らしの中に、別段賑やかなものは求めていなかった。毎日『行ってくるな』と言って仕事に出かける父親を嫌っているわけではなかったし、自分のことをきちんと考えてくれていることはわかっている。確かに少し互いに噛み合わないところがある生活だったが、そんなものだろうと納得していた。いや、半ば諦めていた。

「芳樹、おはよ」

背後から話しかけられ、芳樹は立ち止まって後ろを振り返った。

すると、そこには芳樹と同じ中学校の制服を着た女生徒が立っていた。最近伸ばし始めたという肩辺りまでの黒髪を揺らし、人のよさそうな顔に微笑を刻んでいる女生徒は、芳樹の幼馴染、

「ああ朋美か、おはようさん」ひいろぎともみ 柊朋美だった。

「芳樹、その気だるそうな態度やめた方がいいよ？　いつか損するって」

「これはどうしようもない俺の個性なんだよ、今さら治せないし」
ただ家が近かったからか、それとも学年が同じだったからかは定かではないが、芳樹と朋美の付き合いは長い。今は中学二年生だが、芳樹の記憶する限り小学校に入る前からの知り合いだ。しかし、同じクラスになったのは今年が初めてで、その初めてのクラスメイトとしての一年も、あと二ヶ月ほどで終わりを迎えることになる。

「そついえば芳樹、今日はボランティア活動前の集まりがあるけど、忘れてないよね？」

「いや、今思い出した。まあそんなもの、出ないけど」

芳樹は肩をすくめつつ答えた。

「だめ。今年こそ出てもらうからね」

「またか。朋美もよく飽きもせず誘うな」

「これは誘いじゃなくて、強制だつてば」なぜ朝からこんなに元気があるのだろうか、教えて欲しくなるほど張りのある声で朋美は答えた。

芳樹が言った通り、朋美は去年も芳樹をボランティア活動に参加させようとしていた。芳樹や朋美が通っている鹿児島市立の中学校は、この時期になると地域ごとのボランティア活動を行っている。それぞれの地域の生徒が担当する場所を回り、普段は出せなかったり、また溜まっていたりするゴミを回収して処理する、という内容のものだ。本来なら強制参加なのだが、参加しなかったからといって咎められるようなことはないので、去年芳樹は参加しなかった。面倒だったのと、ある問題があったからだ。

「もう、芳樹は良心というものがないの？」

「ないわけじゃないけど、このくらいのことじゃ痛まないな。それより、そろそろ学校に行かなきゃまずいでしょ」

そう、先ほど朋美に話しかけられたときから、ずっとその場で立ち話をしていたのだ。時間的な余裕がないわけではないが、こんなことをしているほど暇なわけでもない。

「本当だ。じゃあ行こう、芳樹」

「まあ別に、行きたくて行ってるわけでもないけど」

「もう、またそう言うこと言う……」

やる気のない発言をしては、そのことを朋美に咎められる。そんなことを幾度となく繰り返しながら、芳樹は今日も中学校へと歩を進め始めた。

「だから、今年は同じクラスなんだし、私には芳樹を参加させる義務があるって言ってるでしょ」

既に授業は終わり、あと十分でボランティア活動についての話し合いが始まるという時刻。閉ざされた窓から差し込む橙色の光が、椅子に座っている芳樹と、その目の前で腰に両手を当て、子供を叱るようにして声を上げた朋美を照らし出していた。

「俺は行かない、面倒だし」

事実、面倒ごとを前にして駄々をこねている自分の姿は、まさに子供なのかもしれないと芳樹は思っていた。

「まったく、どうしてそんなに強く嫌がるのかな」

「それは……」

このままでは、比喻ではなくずっと朋美と言い争いが続くかもしれない。それにこのまま目の前の彼女に迷惑をかけ続けるのもよくない。そう感じ始めた芳樹は、説明する口を開きかけたが、

「まあ、わからなくはないんだけど」

突然、それまでの呆れ半分の態度を消し、心に響くような声音、真っ直ぐな視線を向けて言った朋美に、続ける言葉を塞がれた。

伊達に長い付き合いはしていない、自分の考えなどお見通しか

。こみ上げてきた嬉しさ半分、気恥ずかしさ半分の苦笑を隠すため、芳樹は目の前の幼馴染から視線を逸らす。そしてこれ以上は無理だと観念し、思いのほか素直に出た声で答える。

「わかった、行けばいいんでしょ、行けば」

「うん、それでよろしい。早く行くよ」

荷物を纏めてあった鞆を手に取り、芳樹は早足で歩き始めた朋美の後姿を追う。

いつの間にか自分より背が小さくなった朋美は、同時に自分の心を見透かすことができるほど成長していた。それでも感謝の言葉を述べることなどできない芳樹は、その華奢な背中を視界に捉え続けた。後について歩くしかなかった。

そうこうしているうちに話し合いが行われる教室の前まで辿り着き、「すみません、遅れました」と言いつつ席に着く朋美にならない、芳樹も彼女の隣の席に着く。既に話し合いのほとんどは消化されて

いるらしく、黒板には『朝九時集合』、『各自体操服（ジャージ可）
、出来るだけ御両親にも参加頂くこと』と書かれていた。

そう、これだ。これが問題なのだ。

「以上で説明は終わりです。基本的には昨年と同じように進めますが、質問がある人はいますか？」

持っていたチョークを置き、担当の教師が教室内を見回す。芳樹と朋美の他に生徒は三人しかおらず、質問の声を上げる者はいなかった。教室に入った途端に話し合いが終わり、面倒ごとがすぐに済んだことに喜びを覚えた芳樹だったが、それでも今年はボランティア活動に参加しなければならぬという事実が、心の底に暗い淀みを作っていた。

「それでは、解散です」

教師の声がかかり、周りの人間は次々に教室を後にしていく。椅子を動かす音が響く教室の中、しかし芳樹だけは未だに立ち上がっていない。そのことに気づいた朋美が、隣から芳樹を見、そして気遣わしげな声をかける。

「ねえ芳樹、私が言うのも変だけど、やっぱり嫌なら無理に出なくても……」

朋美らしい言葉だった。彼女は筋を通すことを重んじ、そして実行しながらも、最終的にはそれよりも大事なものがあることを知っている。それは人の気持ちであり、それぞれの主義主張だ。だからこそ芳樹に合わせ、未だに席を立とうとしない。

だが、そんな朋美が勧めたことからこそ、芳樹には今さら断ることはできない。元々朋美の言っていることの方が正しいのだし、ここまで気を遣わせたからには参加しないわけにはいかない。一度決めたことを覆すようなことを、芳樹はしたくなかった。

あるいは、ただ朋美を裏切りたくないだけだったのかもしれない。「いや、出るって。明日の土曜日だろ？ 必ず行く」

「そっか、うん、わかった。芳樹の気持ちも固まったことだし、そろそろ帰ろっか」

「そんな大袈裟なことでもないけど、っと」

言いつつ立ち上がり、芳樹は鞆を手に取る。「でもやっぱり面倒だ」、「もう決めたんだからうじうじ言わない」などと他愛ない会話を交わしながら、自然に朋美と一緒に帰路につき、気がつくとき芳樹の住むアパートの前まで来ていた。

「そう言えば芳樹、今日は私の家で晩御飯食べる日じゃん」

「ああ、そうだった……。いつも悪い」

仕事の忙しい芳樹の父親は、毎日帰りが遅い。一人だけの夕食は寂しいだろうと、金曜日と月曜日は朋美の母親が大久保家の分まで夕食を準備してくれる。伸樹の分は毎回芳樹が家に持ち帰るという手筈になっており、この習慣は芳樹の母親が亡くなったときから続いている。なんでも芳樹と朋美の母親は互いに仲が良かったそうである。今はその好意に甘えさせてもらっている。

「お礼なら、うちのお母さんに言って？ それじゃ、今日も八時頃に来る？」

「そのつもり」

「わかった。じゃ、また後で」

手を振りつつ言った朋美に「また後で」と返した芳樹は、アパートに戻るべく歩き始めた。

ボランティア活動のことを、父親にどう言えばいいものかと考えながら。

自分の家と比べてあまりにも暖かな雰囲気の中、芳樹は朋美の母、柊洋子（ひしぎようこ）の作った酢豚を食べていた。芳樹にとっては慣れない生活感に満ちた家ではあったが、居心地の悪さは感じず、むしろ落ち着いていられる場所だった。

「ごちそうさま。美味しかったです」手を合わせつつ、洋子の方を向いて言った。

「そう？ 芳樹君にそう言ってもらえるなら、作った甲斐があったよ」

朋美に似た　どちらかと言うと朋美が受け継いだのだが　人のいい笑顔を浮かべ、洋子は「朋美、後片づけをお願い」と朋美に告げる。

「うん、わかった」朋美は立ち上がり、三人が囲んでいるテーブルから少し離れたキッチンへと向かう。

いつもそうだった。芳樹はここ柊家に夕飯を食べに来るたび、朋美が後片づけをしている姿を見ていた。もっとも、日頃の生活態度を見る限り納得ではあり、さらにはここが彼女の性格を形作った場所であるのだと改めて感じる。

そんなことを考えていたからだろうか、

「どうしたの芳樹君、ずっと朋美を見てるけど」

なぜか面白いものを見るような顔をした洋子に指摘されるまで、芳樹は自分がキッチンに立つ朋美の後姿を眺めていることに気がつかなかった。

「あ、いや……」当然ながら、まともな答えなど出てくるはずもない。

しかし、そんな芳樹をからかうことはせず、今度は優しい笑顔を浮かべた洋子は、少し体を乗り出して小声で言う。

「朋美ね、今年こそは芳樹君をボランティアに参加させるんだって、すごく意気込んでたんだよ」

「え……」

思いも寄らない言葉に、声が詰まった。幸い、朋美が気づいた様子はない。

「ほら、去年は芳樹君、結局参加しなかったでしょう？　そのことを朋美、気にしてたみたい」

なぜだろう……？　朋美が気にする必要などないのに。自分自身の勝手な都合でそうしただけなのに。そんなことまで、朋美が気にかけてくれる必要なんてないのに。

「だから芳樹君、色々あるとは思うけど、少しは朋美のワガママを聞いてやって？」

「ワガママだなんて……。今年は参加するつもりでいます」

「ありがとう、よろしくね」その言葉を聞いて安心したのか、洋子は立ち上がって朋美の手伝いを始めた。二人並んでキッチンに立つ姿を眺めていると、改めて親子なのだと感じる。

そうやって穏やかな時間を感じながら、芳樹は先ほどの洋子の言葉を反芻していた。朋美は今時珍しい、真面目過ぎるほどの性格であることも、他人の立場に立ってものを考えられる人間だということも知っている。しかし、ただ情性という理由だけで付き合っているような自分を、何事にもやる気を見せないような自分を、そんな風に考えていてくれたなど想像したこともなかった。そのことに胸の内が温かくなるのを感じる反面、芳樹は朋美の気遣いに応えられていない自分を恥じた。そしてだからこそ、今度のボランティア活動には参加しなければならぬと思う。

「はい、芳樹君。お父さんによろしく」

考え事をしている間に、夕食の後片づけが終わったらしい。酢豚が入っているであろうタッパを受け取り、芳樹は「いつもありがとうございます」と言いつつ頭を下げた。

「いいのいいの。ほら朋美、芳樹君を送ってあげて」

「お邪魔しました」

もう一度頭を下げてから、既に玄関に続く廊下で待っていた朋美の方へ向かう。「今日も美味しかったでしょ？」と口を開いた朋美に頷き、芳樹は玄関に向かい、靴を履いた。立ち上がると靴棚に飾られた花が香り、芳樹はまだここにいたいらしい自分を自覚した。

それでも家には戻らなければならない。「私も外まで行く」と言った朋美と一緒に外に出て、自分の住んでいるアパートの前まで並んで歩いた。なぜか会話はなく、冬の夜風が冷たかった。

そして家に帰ろうと、芳樹が挨拶を交わそうとしたとき。

「それじゃ」

「あのね」

朋美の気遣いを改めて知った芳樹と、どこか落ち着かない様子の

朋美が、互いの口を開いたのは同時だった。朋美の吐く息が白い。芳樹が黙って先を促すと、朋美は視線を自分の手に落とし、遠慮がちに言葉を継いだ。

「あのね芳樹、私は……」意を決したかのような朋美の瞳が、芳樹を見据えた。「苦しいのは、がんばってる証拠だと思うんだ」

とつさには、返す言葉が浮かばなかった。

「それじゃ、お休み」

芳樹の答えを待たず、朋美は背を向けて走り出す。「ああ、お休み……」と間抜けな声音で応じた芳樹は、その後しばらく夜風舞うアパートの前に立ち尽くしていた。

礼の言葉を言っていないと気づいたのは、黒髪を揺らして走り去る朋美が見えなくなってからのことだった。

芳樹は壁掛け時計の示している午前一時という時刻を確認しつつ、眠いな、と思った。こんな時間まで起きていたのは母親の通夜のとき以来かもしれない。そうして眠い思いをして起きていたが、外から聞こえてくる足音に、芳樹はそのときがきたことを感じた。

軋む音を立て、玄関のドアが開かれる。芳樹はその音を聞かたび、蝶番に油を差さなくてはと思うのだが、それを実行できたためしはない。

「なんだ、起きてたのか」

ドアを開けた本人、芳樹の父親である伸樹が胸元のネクタイを緩めながら言った。久方振りに見た父親の帰宅姿に戸惑いつつ、芳樹は伸樹を真っ直ぐに見据えたまま口を開く。

「父さん、少し話があるんだ」

既にネクタイを外し終わり、シャツのボタンに手をかけていた伸樹は一瞬、その手を止める。

「そうか」手の動作を再開して、伸樹は応える。「風呂を済ませてくるから、少し待っていてくれ」

浴室の方に歩き出した伸樹を見送り、芳樹は夕食の準備をしよう

と立ち上がった。もつとも準備とは言っても、洋子から受け取ってきた酢豚を電子レンジで温めるだけだったが。そうやって、初めてかもしれない父親の夕食の準備をするという時間を過ごしながら、芳樹は伸樹にどう伝えたらいいものかと思案していた。

参加を頼むにしても、「一緒にボランティアをしよう」じゃ恥ずかし過ぎるし、「学校行事の一環なんだ」では言いわけくさい。それに、そもそも急にそんなことを頼んでも、仕事が休みだとも限らない。芳樹は今さらながらにこの頼みの是非が絶望的であることに気づいた。

そうこう考えているうちに伸樹が風呂から出てきて、「わざわざ用意してくれたのか、ありがとう」と言いながら夕食が用意してあるテーブルの前に腰を下ろした。そしてなんの用事なのかと問う目を芳樹に向けてきた。

芳樹は未だに考えがまとまっていなかったが、家に戻ってから放つておいたままの鞆から一枚の紙を取り出し、テーブルの上に置いた。ボランティア活動についてのことが印刷されたものだった。

「これに、一緒に出て欲しいんだ」

言った。ついに言ってしまった。今まで息子らしいことをしたこともないというのに、あまりにも身勝手な頼みごとをしてしまった。テーブルの上の紙を見つめたまま、無言でいる伸樹を見ると、その不安が大きくなってくる。そして長い沈黙が、あるいは長く感じていただけかもしれない沈黙が破られたのは、芳樹が諦めかけたときだった。

「そうか、わかった」

発せられた声は、驚くほど軽いものだった。

「え……えっ？」返ってきた言葉が意外過ぎて、芳樹は聞き返してしまっていた。

「だから、わかったと言ったろう。なにか変か？」

「いや、だって、仕事は？ なにも用事ない？ それに面倒じゃん、ボランティアなんて」

「仕事も用事もないし、芳樹の頼みなら断る理由もないだろう」

「そう、かな……」

伸樹は持ったままだった箸を置くと、真っ直ぐに芳樹の目を見据えてきた。それは相手を威圧するわけではなく、ただ誠実な光を湛^{たた}えた瞳だった。

「そうだ。……正直言つて父さんは、今まで芳樹に対して父親らしいことをしてこなかった。こんな性格だからというのもあるが、なにより芳樹が望むならそうしようと考えたからだ。望まれもしないのに、父親面されても困るだろうからな」

違う。今まで父親として疎んだことは一度もない。

「だが、今回は芳樹がそういうことを望んでいるようだから、父さんは芳樹の頼みを引き受ける。ただそれだけだ」

静かに締めくくった伸樹に、芳樹は「うん……」としか答えることができなかった。

今まで芳樹は、自分の父親がなにを思い、なにを考えているのか聞いたことがなかった。いや、訊こうと思ったことすらなかった。初めてその心の一端に触れ、芳樹が思うことは、やはり目の前に座っている人は、紛れもなく自分の父親なのだったことだった。

結局のところ、伸樹も一人の不器用な人間だということなのだろう。父親らしい態度を取ることさえ、子供に許可を得ずしてしなかったように。父親が父親らしくすることに疑問を持つ子供など、この世界にはいないというのに。

少し縮まった伸樹との距離を嬉しく感じ、芳樹はこんなことなら去年もボランティアに参加すればよかったと後悔した。

「この酢豚、相変わらず美味しいな」

その声に思考を中断すると、伸樹は今晚の夕食を味わっているところだった。どうやらもうこのことについて話す必要はないらしいと感じた芳樹は、テーブルの上の紙を取る。それを元あった場所に戻そうと鞆を開けたときだった。

「ところで芳樹、どうして今年は参加しようと思ったんだ？」

我が父親ながら、鋭い質問だと思った。先ほどの紙の中に、毎年行われている旨のことが書いてあったのだろう。

「それは……。ほら、柊さんとこの朋美。あいつに強く誘われて」「そうか。付き合いの長い人というのは財産だ。大事にするといい」思いがけない伸樹の言葉に、彼もまた付き合いの長い人に助けられたことがあったのかもしれないと芳樹は想像した。歴史は繰り返すものらしい。そう考えるとなんだか可笑しく、芳樹は自分でも知らないうちに微笑を浮かべていた。

「あ、芳樹、本当に来たんだね」

「おい、まさか信じてなかったのかよ」

伸樹と共に集合場所に姿を現した芳樹は、到着早々にジャージ姿の朋美と言葉を交わした。「いや、そういうわけじゃ……」と、しどろもどろに答えた朋美に苦笑を向けつつ、芳樹は自分の住んでいる地区の責任者の元へ歩を進める。時刻は八時五十分。

「おはようございます。大久保、来ました」

「おはよう。お父さんも、おはようございます」

後ろを振り返ると、そこには「おはようございます」と頭を下げた伸樹の姿が見えた。あまり会話を交わさないまま朝食を食べ、ほとんど会話を交わさないまま身支度を済ませ、全く会話を交わさないままこの場所に到着したが、芳樹はただそれだけで満足だった。そう、ただ当たり前の親子としてここにいるだけで。

さらに芳樹は、朋美の自分に対する態度がいつも通りだったことにも安堵を覚えていた。昨晚の彼女の言葉は、苦悩していた芳樹を後押ししてくれたが、それと同時に、朋美の胸の内をわからなくさせてしまった。いつも通りの気遣いのような、それでいていつもとは少し違う質の気遣いのような、とにかく内心の読み取れない言葉だったからだ。

「ほら芳樹、そろそろ始まるよ」

朋美の声に思考を止めると、もう目の前に責任者はいなかった。

「皆さん、本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます」

その言葉を皮切りに、今日のボランティア活動の段取り説明が始まった。芳樹や朋美を含む生徒たちは、それぞれに担当する区域を回って外に出ているゴミを回収してくる。既に地域中に通知しているので、家の中まで上がり込む必要はない。そして保護者は集合場所で待機し、生徒達が集めたゴミを分別して処理する。少し大人が余るのではないかと思った芳樹だったが、周りを見回すと保護者は数えるほどしかいなかったので納得した。

「それでは皆さん、各自作業を開始してください。がんばりましょう」

芳樹は朋美と共に回るようになっていたので、朋美に歩み寄る。

「じゃ、行くか」

「うん、がんばろうね」

芳樹は頷いて答えつつ、何台もある台車のうち一台を押し、担当する区域へと歩き出す。隣には、他の生徒と同じように体操服の上にジャージを着た朋美が並んで歩いている。

「けど、本当に良かった、芳樹が参加してくれて」

「一度言ったことだし、嘘はつかないって」

「芳樹のお父さんも、一緒に来てるみたいだし……ね？」

目を逸らしたままに、「まあな」と答える芳樹。そのことについては少なからず朋美に助けられたと自覚してはいるが、芳樹には口に出して礼を言うことはできなかった。

そうやって会話を交わしながら回ると、すぐに時間が過ぎ、台車の上には集めたゴミが多く溜まった。そして、最後の家の前に来ると、そこにはにやかな顔をした初老の女性がいた。「佐藤さん、こんにちは」と朋美が言ったので、どうやら知り合いのようだ。

「こんにちは、毎年ありがとうねえ」

老人は芳樹と朋美、両方に微笑みかけた。「好きでやっていることですから」と言った朋美とは裏腹に、芳樹は「いえ……」としか

言葉を返すことができなかった。毎年、という一語が引っかかったのだ。それでも体だけは動かし、ゴミを積み終えてからその場を後にした。

それから芳樹と朋美は朝集合した場所に帰り、集めてきたゴミを大人たちに渡した。他の生徒も続々とゴミを集めてきていたので、用意されていた軽トラックの荷台はいっぱいになった。それを見た芳樹はなぜか気分が良くなり、清々しい気持ちになっている自分を感じていた。これがボランティアというものなのかと、改めて感じた瞬間だった。

「芳樹、ご苦労だったな。こんなにたくさん、大変だったろう」

「いや、別に一人で全部持ってきたわけじゃないから。皆で協力したからこそできたんだよ」

伸樹に話しかけられ、芳樹は自然に答えていたが、発した言葉が自分のものとは思えなかった。皆で協力したからこそできた。それこそがボランティアの本質であり、力を合わせてなにかを為すということなのかもしれない。そう気づいて隣を見ると、穏やかな表情を浮かべている朋美が「例え毎年じゃなくても、すること自体が大事なんだよ」と静かに耳打ちしてきた

このことを教えるために、朋美は自分にボランティアへの参加を勧めたのだろうか。朋美のことだ、そうに違いない、と芳樹は思う。どうやら名実共に朋美には敵わないらしいと感じながら、芳樹はゴミを車に乗せて学校へと向かう大人たちを見送った。現在時刻は十一時。あとは昼までの間、辺りのゴミ拾いをするようになっていく。

「芳樹、次は公園だよ」

「残り一時間弱、がんばるか」

数匹の鯉が泳いでいる池。水を散らしている小さな噴水。所々に設置されているベンチ。

ジャージ姿の芳樹と朋美がいるのは、二人が住んでいる地区にあ

る公園の中。そこでゴミ袋を片手に落ちている空き缶などを拾い集めているのだが、その量が多い。それぞれ一つずつ袋を持っているが、どちらも満杯になりそうな勢いだった。

「なあ、ゴミ多くないか？」

「普段は感じなくても、こういう時は多く感じるよね。平気でゴミを捨てる人は、そう思ったことがないんだよ、きっと」

そういう人はいつになってもゴミを捨てたり、他人に迷惑がかかるようなことを平気で行う。芳樹は学校に行くことなどを面倒に思うことはあるが、サボったことはない。そういう人として最低限守らなければならない節度は守っているつもりだった。だからこそ朋美が言うような人種は許せないし、同時にどうやっても救えないものだと思っている。

そんなことを考えたからだろうか、芳樹の胸の内に、ある疑問が頭をもたげてきた。

「朋美はさ、こうやってゴミを拾うことが虚しいと思ったことはないか？」

すると朋美は、足元の空き缶を袋の中に入れてから、「なんで？」と視線を返してきた。

「せっかく綺麗にしても、また誰かがゴミを捨てたら同じだろ？ 事実この公園だってこんなに汚れて」

「違うよ芳樹、同じじゃない」

芳樹の言葉を遮り、朋美は作業を進めながら言った。凜とした声、冷え切った空気に揺れる黒髪、人には見えないなにかを見据えている瞳。そのどれもが芳樹にとって眩しく、そして朋美を遠くに感じさせる。

「どんな人でも、汚れている公園よりは綺麗な方がいいよ。例えば一時でも、澄んだ気分でいられるのはいいことでしょ。綺麗にしていたら、ゴミを捨てるのを躊躇う人がいるかもしれないし」

そう言われると、「それはそうだけど」としか返せない。

「それに、こうやってなにかをしている私たちの姿を、どこかで見

ている人がいるかもしれない。次からはそういう人が、この場所を綺麗にしてくれるかも、とは思わない？」

「だけどさ、朋美が言ってるのは全部可能性の話だろ？ 全部が全部、朋美の言ったようにはならないさ」

確かに可能性を信じるのはいいことだ。しかし、世の中はそううまく動くものではない。どんなに信じても、どんなにがんばっても、報われないときというものはあるし、むしろそのことの方が多い。

そんな曖昧で不確かなものを信じることに、価値があるのだろうか

。芳樹はそう思わずにはいらなかった。

そしてそれと同時に、朋美がどんな答えを出すのか聞いてみたいと思った。

冷たい風が吹き荒む公園の中、土埃が舞い、朋美の黒髪も揺れる。芳樹の言葉に静かに耳を傾けていた朋美はゴミを拾う手を止め、今度は完全に芳樹に向き直った。

刻まれるのは、見慣れた静かな笑み。

「芳樹こそ、その証人だと思っただけど？」

「俺が、証人……？」

かけられた言葉の意味がわからず呟いた芳樹に、「そうだよ」と言葉を継ぐ朋美。

「現実になれるからこそ、可能性というものはあるんだよ。今はまだ可能性に過ぎなくても、それを信じればいつかは現実になる」

朋美はそこで言葉を区切り、なぜか芳樹に背を向けた。曇り空の下、全ての物が淀んだ色を晒さらしている中で、朋美の背中だけは芳樹の瞳に鮮やかに映っている。

そして少し、朋美は体を強張らせて言う。

「そうやって私が信じたからこそ、芳樹はここにこうしていてくれるんだって、そう思ってる」

背を向けられているため、朋美の表情は窺えない。しかしその背中から、声音から、今の言葉が彼女の心からの声だということはわかった。

「確かに、それは違わないけど……」

気の利いたことは言えず、やっとそう返した芳樹だったが、朋美は気にする様子もなく振り返る。ただ、彼女の伏せられた視線は、芳樹のそれと交わることはなかった。

朋美は自分のことを気にかけてくれていた。他でもない本人から聞かされたその事実が、今は芳樹にとつて嬉しく、同時にどうしようもなく言葉を詰まらせる。それでも無理やりに口を開いて出たのは、朋美に同意する言葉。

「人ってというのは、いつも境界線に立っているのかもしれないな」「境界線？」朋美が顔を上げる。

「そう、境界線。だからこそ人は、簡単に境界の内側にも外側にも動いてしまう。今回は朋美の声が、俺を動かしたってことだな。それは多分、いい方向だったんだろうけど」

芳樹が言い終わると、知美は再び笑顔を浮かべた。言葉に乗せた感謝の思いが伝わったのだと、芳樹は静かに安堵する。ただ、これ以上は無理だ。真面目な会話を続けられそうにない。

「まったくその通りだよ。私のおかげなんだから、感謝してもらわないとね」

だからこそ、朋美の茶化したような言葉には救われた。こういう場面で、付き合いの長さはいいものだと感じることができる。そしてその相手が、朋美でよかったと思うことができる。

「ありがた迷惑ってやつだな」

「ひとつどいなあ、もう。芳樹はすぐそういうこと言うんだから。ほら、続けるよ？」

「わかったよ。せいぜい時間までがんばりますか、っと」

一つ背伸びをして、改めて辺りを見回す。そこはゴミの散れた公園でしかなかったが、少しずつ、しかし確実に本来の美しさを取り戻しつつあった。

それから先の作業は、滞りなく進んだ。公園の清掃を終えた芳樹

と朋美が、回収したゴミを所定の場所に片付け終える頃には、地域で回収したゴミを学校へ運んでいた大人たちも戻ってきた。

ただ一つ、朋美が公園でゴミにつまずいて盛大に転び、せっかく拾ったゴミを辺りに撒き散らしてしまったことを除いて、という条件つきではあるが。

朋美はよほど恥ずかしかったのか、しばらく転んだまま起き上がろうとしなかった。ただ、芳樹は笑いをこらえるのに必死だったため、笑いを抑え込む時間を得られてむしろ助かったのだが。

そしてボランティア活動の締めくくりである最終点呼が行われている今も、朋美は「こういうことになるから公園にゴミを捨てるのはよくないんだよ……」などと呟いている。もっとも、朋美が怪我をしなかったのは不幸中の幸いではあった。

「それでは皆さん、寒い中お疲れ様でした。是非来年も、参加をお願いします」

代表者の言葉を合図にして、参加者全員がそれぞれに家へ戻っていく。時刻は十二時。これから昼食を一緒にする人もいるだろう。

そうやって流れていく人の中、芳樹と父親である伸樹の目の前、終親子が立ち止まった。満面の笑顔を浮かべた洋子は、一度軽く頭を下げてから口を開く。

「芳樹君お疲れ様。大久保さんもお疲れ様でした。貴重な男手のおかげで、今回はスムーズに終わりましたよ」

「お疲れ様です」と芳樹。

「いや、どれほど役に立てたかはわかりませんが。洋子さんもお疲れ様でした」と言ったのは、芳樹の隣にいる伸樹。芳樹は密かに、久しぶりに見た他人と離す父親の姿に戸惑いを感じていた。

「それに朋美さんには、うちの芳樹に参加するよう後押しをしてもらったようです。ありがとうございました」と続ける伸樹。

芳樹は思いも寄らぬ言葉に身を硬くした。抗議しようかとも思ったが、余計みつともないのでやめることにする。

しかし、「私はなにもしてないですよ」と言った朋美から視線を

外すのを忘れてはいけない。目を合わせたが最後、どれほどいやみな表情をされるかわかったものではないからだ。が、後からこのことであられるのは必至だろう。

「それではまた。月曜と金曜には芳樹君をうちに来させてくださいね」

「じゃあね、芳樹」

二人と挨拶をした後、気づけば周りに誰もいなくなっていた。二人きりになった場所で、芳樹は言う。「それじゃ、帰ろうか」

「そうだな。今日は気分がいいから、久しぶりに父さんが食事を作るか」

「やったことない料理に手を出そうなんて、一体どんな気分だよ」

「なに言ってるんだ、父さんは今まで、母さんの 芳子が作った料理を食べてきたんだ。できないはずがない」

その言葉に、芳樹は声を上げて笑った。伸樹の言葉で笑ったのは、いつ以来かわからない。冗談を言ったつもりはないのだろう、自分の父親が不機嫌そうな顔をしているのが、なおさら面白かった。

「なら父さん、米のとき方知ってる？」

「そんなのは簡単だ。まずは洗剤を使っただな……」

伸樹の言葉を最後まで聞くことなく、芳樹は再び大声で笑った。

辺りに響き渡る鳥の鳴き声が、地域一帯に朝の訪れを知らせている。その地域のアパートの一室の中、壁際に置かれたテレビは朝のニュースを映し出し、テーブルについている二人の親子は少し会話をしながら朝食を摂っていた。

「芳樹、今日は早く帰ってくるから二人で柊さんの家にお邪魔しよう」

「別にいいけど……親子揃って夕食時の他人の家に上がり込むなんて、つくづく生活能力のない家庭だと思われそう」

その会話は芳樹と伸樹のものだ。

しばらくして、用意されたトーストを食べ終えた伸樹は鞆を手に

取り、「じゃあ芳樹、行ってくるな」椅子を引いて立ち上がった。

「行つてらっしゃい、父さん」

芳樹は言つてから手にしたトーストを口へ放り込み、視線を玄関へと動かす。そこには振り返り、軽く手を上げた父親の姿があった。口の中にまだ食べ物が入っている状態の芳樹は、そのまま喋る愚を犯さず、自らも軽く手を上げて応えた。

これが大久保家の日常、その常日頃の姿。ただそれは、数日前から少しずつ変わってきている。まだまだ弾んだ会話ができるような状態ではないが、芳樹は伸樹との会話が増えて嬉しく思っている。以前の静まり返った雰囲気にも一応納得はしていたが、どうせならよりよい方がいい。これから互いに歩み寄っていけば、さらに気が休まる環境になっていくだろう。父親とその息子が、互いに歩み寄るなどおかしな話ではあるが。

「そう、確かにおかしな話……」

そんな考えに一人苦笑を浮かべた芳樹は、壁掛け時計を見て立ち上がった。いつもより少し早い時間ではあるが、いつものように靴を手に取ってから戸締りをする。そして靴を履いて玄関を出ると、勢いを増しつつある北風が吹き抜け、芳樹の髪を揺らした。

そのまま歩き出さずに、アパートの前で立ち止まる。今日は一つだけいつもと違うことをするために、少し時間が必要だからだ。そうして待っていると、セーラー服に身を包んだ人影が見えた。

「あれ、芳樹。今日は早いんだね」

少しでも外気に触れたくないのか、手を制服の袖から出していない朋美が、少し驚いたような表情でやってきた。揺れる黒髪、響く声音、真っ直ぐな瞳。そのどれもが見慣れたもので、芳樹に日常を感じさせる。

「たまにはこうやって、これ見よがしに待ってるのもいいかなと思つてな」

「相変わらずひねくれてるね、芳樹は」

わざとらしくため息をついた朋美は、言葉とは裏腹に笑顔を浮か

べていた。

言うなら、今しかない。

「なあ朋美……」

「うん？」今度は首を傾げる朋美。その瞳を真っ直ぐに見ることはできないが、それでも彼女に届くように言葉を紡ぐ。

「……ありがとう、な」

普段は口にしない類の言葉を口にしたからか、朋美が驚いているのがわかる。大きくまばたきをした朋美は、次の瞬間には芳樹に背を向け、

「どういたしまして」

いつもよりも少しだけ、弱い声音で答えた。

背を向けられているため表情は窺えないが、芳樹には自分の感謝の気持ちが伝わったことがわかる。どんな顔をしているのか覗いてみたくないわけではない芳樹だったが、今はそれだけで十分だった。そして芳樹は朋美から視線を離し、そのままゆっくりと瞳を上へ動かす。

見上げれば、いつも通りにそこにある蒼穹^{そうきゆう}。しかしそれは、確実に日々変化している。そうやって流れていく時間が、少しずつ変わっていく自分や周りの人が、今はなによりも大事だと思える。

これからも自分は、境界線の上で生きていくのだろう。過ごしていく年月の中で様々なものに影響され、右に左に揺られながら。それでも、自分を見失わずにさえいれば、助けてくれる人が傍にいてくれれば、よりよい方向へと自分を導いていくことができるだろう。だからこそ今を、どこかへと自分を導いてくれる今を、ただ精一杯に過ごしていこう。

「ちよつと芳樹、いつまでそうしてるの。そろそろ学校に行かなきゃまずいでしょ」

「あ、そうだな」

朋美に言われ、芳樹は彼女と共に歩き出す。今日はどんなことがあるのだろうか、まだ見ぬ時間を思いながら。

「ねえ芳樹。来年も、同じクラスになれるといいね」

「ああ。俺もそう思うよ」

ねえ母さん、俺は今を生きてるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8752i/>

境界線の上で

2010年10月8日15時25分発行